

Coffee Break

Feb 2007 Vol. 60
コーヒーブレイク

●【連載】コーヒー産地の香り

ケニヤ共和国

●コーヒー物語

コーヒー産業の変貌と進化1

●コーヒーと健康

コーヒーが肥満を防ぐ…?

●ヨーロッパの文学カフェ

文学と芸術を生んだ カフェ・ドゥ・マゴ



Coffee Break

コーヒーブレイク 2007 FEB. Vol.60

Coffee Breakは、昭和56年の創刊以来、コーヒーの生産・消費・市場・歴史・文化・科学情報など、様々な視点から長い時間に渡ってコーヒー業界内の大きなトピックスを記録し続けてきました。

日本人の生活の中でコーヒーが親しまれるようになって以来数十年、今やコーヒーは単なる嗜好飲料の枠を越えて、ライフスタイル、ファッション、カルチャーの形成の一部としての役割を果たしつつあります。また、「コーヒーと健康」といった飲用面からの科学的分析も近年活発に行われるようになりました。

現在、Coffee Breakは業界情報誌として、またコーヒー専門誌として、コーヒーにまつわり「現在、何が考えられ、何が行われているか。」を読者の皆様に御紹介しております。

CONTENTS

ヨーロッパの文学カフェ 文学と芸術を生んだカフェ・ドゥ・マゴ 南川三治朗	1
Coffee Culture 名曲の中のコーヒー⑥	8
コーヒーと健康 コーヒーが肥満を防ぐ…?	10
Coffee Column コーヒーの歌を詠む ギローム・マシュエ『コーヒーの歌』前編	14
連載・コーヒー物語 6 コーヒー産業の変貌と進化 1	18
連載・コーヒー産地の香り7 ケニヤ共和国	25
コーヒーブック情報	31
全日本コーヒー協会活動報告	32

文学と芸術を生んだ カフェ・ドゥ・マゴ

ヨーロッパの中で、パリほどそこに住まう人の一人一人が
確かな自分の生活を持っている街はないだろう。
パリっ子は超個性的といえる。
一杯のコーヒーを傍らに何時間も新聞を読んでいる人。
甘いさやきを交わしあう恋人たち…。
お互いに、お互いの存在を認識することもない…。
しかし、テーブルの上に置かれたコーヒーだけが
彼らに共通する唯一のものであり最高のものなのだ。

文・写真 南川三治郎





Les Deux Magots

カフェ・ドゥ・マゴ

パリのセレブリティたちのランデヴーの場所
として知られるカフェ・ドゥ・マゴはサン・
ジェルマン・デ・プレ教会の交差点の角にある。



サルトルとヴォーボワールが毎日座った席は、道路に面した奥の角。



パリ右岸、華やかに道ゆく人々を眺めながらいただくコーヒーの味はまた格別。

第二次世界大戦直後から、実存主義者や、そのシンパの若者たちのサロンであり、書齋であった。その中心人物のサルトルはドゥ・マゴの5階に、生涯の伴侶であったドゥ・ウオー・ボワールは2階に住んでいた。生前、毎日、



カフェ・ドゥ・マゴで働くギャルソンはいちいちも鮮やか。

サン・ジェルマン・デ・プレのカフェの華やかな歴史は、50年代に実存主義の生みの親ジャン・ポール・サルトルがこの界限に住み、カフェ・ドゥ・マゴとその隣のカフェ・フロールの常連になった時から始まる。セーヌ川のリヴ・ゴージヌ、洒落たブティックやギャラリーなどが建ち並ぶ賑やかな界限の中心地、サン・ジェルマン・デ・プレ教会まんに位置するドゥ・マゴは文学キャフェの多いパリでも別格の感がある。



サン・ジェルマン・デ・プレ教会

決まった時刻に、連れだつて降りてきては、隣り合わせの二つの小さなテンプルを占領した。彼らは一杯のコーヒーを傍らに、ひっきりなしにタバコをふかし、何時間も執筆をしていたという。そして、彼らに面会にくる客たちも自然にこの店の常連となっていた。ドゥ・マゴは1812年の開店当時からこうした文学キャフェの雰囲気があったという。ジョイスやヘミングウェイ、サンテグジュペリなどの作家たち、ブルトン、パタインユ、ピカソなどのシュールリアリストの溜り場でもあった。つまり、ここは数多くの実存主義者、アンデパンダントなアーティストたちによつてサロン代わりの場所といつでもいいような様相を呈していたのであった。



上 / 店内には店のいわれとなった、二つの中国人形ドゥ・マゴ が飾ってある。下 / コーヒーは茶色のポットで運ばれ、好みの量をタスに注いで飲む。



店内の片隅には1933年以降のドゥ・マゴ文学賞の受賞作品が並ぶ。

ドゥ・マゴは開店当初から文学キャフェの雰囲気があり、質の高い文学作品を発掘するのが目的で「ドゥ・マゴ」文学賞が設けられた。

この店の名「ドゥ・マゴ」のいわれは二人の中国人の像が店内の真ん中の柱の上部に飾られていることから由来している。開店前年にはパリ万国博覧会が開催され、それまで細々ながら入ってきた東洋の文化が大々的に紹介され、その影響もあつてか二人の中国人の人形を柱に飾り付けたのだと伝えられる

この「ドゥ・マゴ」は現在も変わらずここに来る客の顔を眺め、また、「ドゥ・マゴ」をデザインしたロゴマークは、台ニューやコーヒー・カップの装飾にも使われ、お客たちに親しまれている。

この店の特徴のもう一つは、1933年に創設されたドゥ・マゴ文学賞だ。1933年に受賞したレイモンド・クノーをはじめ、アントワーヌ・ブロンダン、フェルナンド・ピヨン、ジャン・リュック・コアタレムなど、そうそうたるメンバーがこの賞をきっかけとして世界に羽ばたいていった。

そして、最近になって道路を挟んで向かいにあるラ・ブラスリー・リップやソニア・リキエルと協力して文学賞だけではなく、音楽、映画、演劇、ファッション、その他の異なった分野で活動するアーティストたちの芸術活動を報賞するサン・ジェルマン・プライズを創設するきっかけにもなったことだ。



冬になると道路に張り出したテラスの椅子の上にはテントが架けられ、寒さを凌いで熱いコーヒーを楽しむ。

個人主義の発達したフランスでは、一杯のコーヒーを注文しただけで何時間いようと、いつこうに干渉することなく、黒い服に真っ白な前掛けを袴にしめたギヤルソンたちも知らん顔して通りすぎていく。

待ち合わせで時間を持って余した人には、客たちの顔を見ているだけでも楽しい。素晴らしいマキヤージュと美しく着飾って、颯爽と店内に入ってくる妙齡のマダム。ノートを広げ、一心不乱に勉強する学生、はたまた頬を寄せあいながら親密な雰囲気のカップルと、人生模様さまざま。ただ単に待ち合わせの場所というだけでなく、一杯のコーヒーと共にくつろぐ生活空間の一部としてカフェを愛しているのだ。

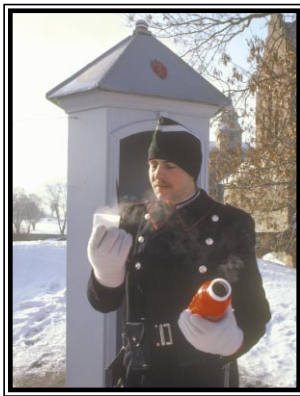
この店のコーヒーは、エスプレッソではなく、いわゆるフランス独特の伝統的なフレンチ・スタイル。今のパリでは珍しい。カフェ・クレームを頼んでみよう。コーヒー・カップにミルクとコーヒーが別々に入った小さな茶色い2つのポット、それにグラス一杯の水の4点セットが小さな銀のお盆に載ってサー



冬の日だまりで日光浴をしながらコーヒーを楽しむ人々。

ヴされる。通りを行き交う人を眺めながらの一杯は格別だ。
お天気の良い日には、ドゥ・マゴの教会に面した歩道で毎日午後、パフォーマンズが演じられているので、このテラスに座ってコーヒーを楽しむのもよい。

ドゥ・マゴ
Les Deux Magots
●住所：6 Place Saint Germain
des Prés 75006 Paris
●営業時間：
7:30 am-1:00 am 年中無休
●電話：+33(0)1 45 48 55 25



表紙

ホットコーヒーの適温は60 以上と言われる。抽出後の香り「アロマ」、さらに口に含んだ時の香り「フレイバー」を十分に楽しむことができる。コーヒーの香りには生理学的にもリラックス効果やリフレッシュ効果が認められている。



社団法人 全日本コーヒー協会